

オセアニア[豪州]

1 農・畜産業の概況

豪州の農業（林業、水産業を除く）は、実質国民総生産（GDP）の2.6%、就業人口で3.1%（林業、水産業を含む）と、産業全体に占める割合は必ずしも高くない（2010/11年度）。しかし、同年度における全輸出額に占める割合でみると、農業は鉱業資源（58%）に次ぐ11.9%となっており、輸出産業の中で重要な位置を占める。

豪州では、国土面積（7億7000万ヘクタール）の51.8%に相当する3億9900万ヘクタールが農業に利用されているが、その大半が牛や羊の放牧地となる自然草地および採草地であり、小麦や他作物を栽培する耕地面積は、2440万ヘクタールにすぎない（2010年6月末現在）。

豪州の農場数は多少の増減があるものの、減少傾向で推移している。2009/10年度は、13万4000戸となっている。

表1 農場数などの推移

(単位: 戸、千人、豪ドル)

区分/年度	2006/07	2007/08	2008/09	2009/10	2010/11
農場数	150,403	140,704	135,996	134,184	-
農業従事者	350.4	354.0	362.4	369.2	351.4
1農場当りの農業粗所得	29,800	64,220	78,980	59,470	117,300

資料: ABARES 「Australian Commodity Statistics 2011」、
「Australian Farm Survey Results」

注1: 各年6月末時点

注2: 農場施設評価額2万2500豪ドル以上の農場

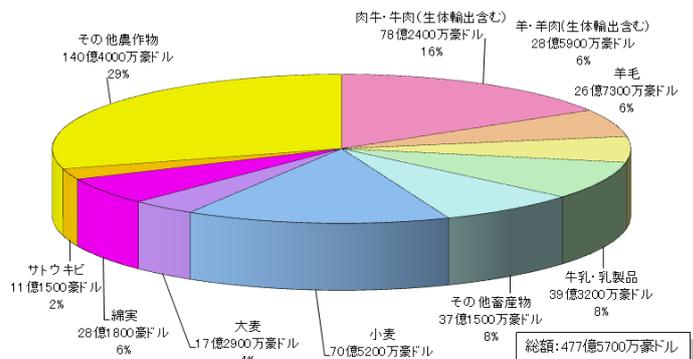
注3: 2010/11年度は暫定値、なお農場数のデータは公表されていない

経営形態では、肉牛、羊、酪農などの専業経営のみならず穀物などとの複合経営も多いことから、農業従事者全体の約8割が何らかの形で畜産経営に携わっているとみられる。

農業粗生産額は2000年以降、干ばつの影響により2002/03年度および2006/07年度で落ち込みをみせるなど変動はあるものの、おおむね増加傾向で推移している。2010/11年度は、小麦や大麦、綿実の増産のほか、堅調な羊毛価格を反映して、前年度比20.4%増の477億6000万豪ドルとなった。

内訳では、畜産物生産が同12.3%増の187億1000万豪ドル、穀物など農作物生産が同26.6%増の267億5000万豪ドルと、畜産物および農作物ともに、前年度を大きく上回った。畜産物粗生産額のうち、肉牛・牛肉（生体輸出を含む）は78億2400万豪ドル（同7.6%増）、牛乳・乳製品は39億3000万豪ドル（同18.0%増減）となった。

図1 農業粗生産額(2010/11年度)



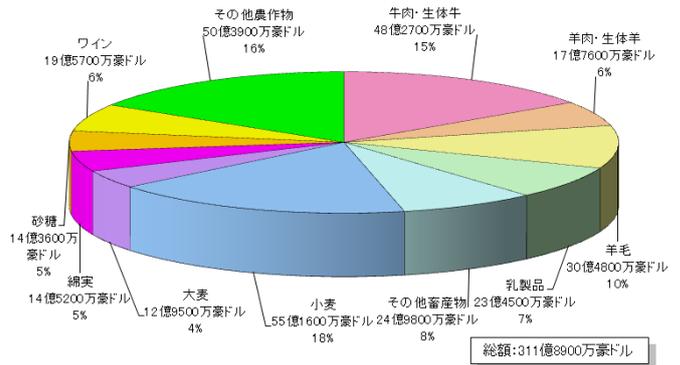
資料: ABARES 「Australian Commodity Statistics 12.2」

2010/11年度の農産物総輸出額（FOB）についても、前年度比14.6%増の311億9000万豪ドルと大きく増加した。

このうち、畜産物輸出額は、同12.3%増の144億9000万豪ドルとなった。内訳は、牛肉・生体牛が48億3000万豪ドル（同7.2%増）、羊肉・生体羊が17億8000万豪

ドル(同7.9%増)、羊毛が30億5000万豪ドル(同32.2%増)、牛乳・乳製品が23億5000万豪ドル(同12.3%増)となった。

図2 農産物総輸出額(2010/11年度)



資料: ABARES 「Australian Commodity Statistics 12.2」

2 畜産の動向

(1) 酪農・乳業

豪州の酪農は、放牧を主体とする経営が大部分であり、気象条件に恵まれ、牧草の生育に恵まれているビクトリア(VIC)州を中心に行われてきた。しかし、最近では、その地域においても、度重なる干ばつを経て、穀物や乾草などの購入飼料の利用が必須となっている。

生産される生乳の約7割が加工向けであり、さらに、製造される乳製品の約6割が輸出向けという輸出依存型産業である。

従って、生乳生産は天候や牧草の生育状況などによって大きく変動するとともに、酪農経営は乳製品の国際市況および為替変動の影響を受けやすいという特徴がある。

① 主要な政策

豪州では、かつて、加工原料乳に対する価格補てん政策(連邦制度)と飲用向け生乳に対する最低価格保証政策(各州の制度)を実施していたが、2000年7月1日に両制度がともに撤廃となり、生乳の販売・流通は完全に自由化された。また、2003年7月には酪農関係機関の再編が行われ、豪州酪農庁(ADC)とほかの研究機関が統合し新たにデイリー・オーストラリア(DA)が発足

し、販売促進や研究開発、マーケット情報の提供などを一括して行っている。

なお、これらの事業財源の多くは、生乳の販売時に課される生産者課徴金(強制徴収)によるものである。

② 生乳の生産動向

乳用経産牛の飼養頭数は、ピークであった2001年の218万頭から、2007年、2008年の度重なる干ばつを経て、減少傾向で推移した。2011年6月末の乳用経産牛飼養頭数は、干ばつ発生前の2006年6月時点と比べ14.9%減の160万頭となった。また、同時点の酪農家戸数も、同22.2%減の6,883戸となった。一方、1戸当たりの経産牛飼養頭数は規模拡大が進み、200頭を超える水準となっている。

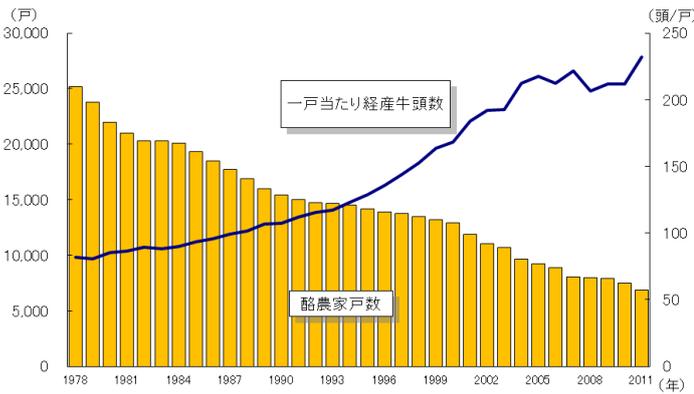
表2 乳牛飼養頭数等の推移

区分/年	(単位:千頭、戸、頭)				
	2007	2008	2009	2010	2011
乳牛飼養頭数	2,663	2,537	2,612	2,542	2,603
経産牛飼養頭数	1,786	1,641	1,676	1,596	1,600
酪農家戸数	8,055	7,953	7,924	7,511	6,883
一戸当たり経産牛頭数	222	206	212	212	232

資料: ABARES 「Australian Commodity Statistics 2011」、Dairy Australia 「Australian Dairy Industry In Focus」

注: 各年6月末時点

図3 酪農家戸数と1戸当たり経産牛頭数の推移



資料: Dairy Australia 「Australian Dairy Industry In Focus」

生乳生産量は、1990年から2000年代初頭まではガット・ウルグアイラウンド合意に伴う乳製品輸出拡大への期待などを背景に、増加傾向で推移してきた。しかしながら、2002/03年度(7月～翌6月)以降は、干ばつなどの影響により減少傾向で推移した。2009/10年度以降は回復傾向を見せ、2010/11年度は、910万2000キロリットル(前年度比0.9%増)とほぼ横ばいで推移した。

経産牛1頭当たり乳量については、放牧に適した品種へと改良が進められたこともあり、日本や米国などと比較してそれほど多くない。しかし、最近では、飼料穀物給与量の増加などにより着実に増加し、2010/11年度は、過去最高の5,699リットルとなった。

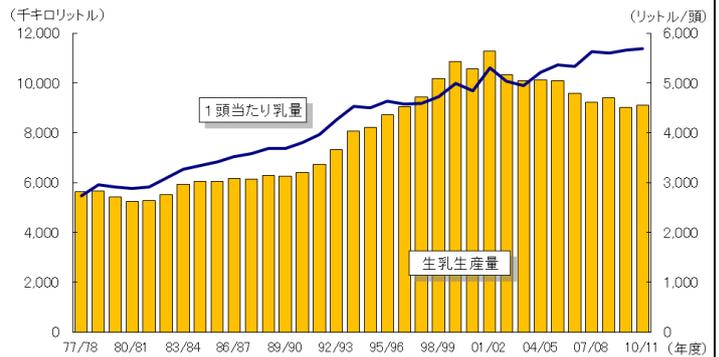
加工用に仕向けられる生乳の割合は、乳製品の輸出拡大に伴って徐々に上昇する傾向にあり、2004/05年度には生乳生産量の8割程度を占めた。しかし、最近では生乳の減産が続いていることや国内の飲用乳需要が堅調であることなどから、2010/11年度の加工向け割合は、74.6%と低下している。

生乳生産量を州別に見ると、VIC州が全体の65.0%を占めて他州を大きく引き離しており、豪州最大の酪農地域であることを示している。一方、飲用乳の処理量は、シドニーなど大消費地を擁するニューサウスウェールズ

(NSW)州が最も多く、次にVIC州、クイーンズランド(QLD)州となっている。

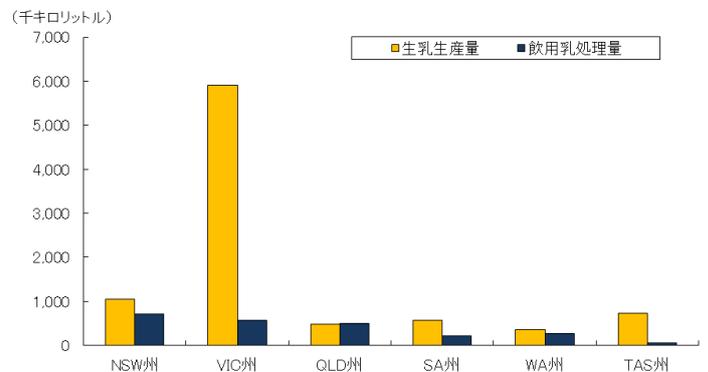
このように、生乳生産に占める飲用向けの割合が州により大きく異なるため、乳業メーカーごとの生産者乳価については、飲用向け割合が高い地域とそれ以外の地域とでは、大きな差が生じている。

図4 生乳生産量と経産牛1頭当たり乳量の推移



資料: ABARES 「Australian Commodity Statistics 2011」

図5 州別生乳生産量(2010/11年度)



資料: Dairy Australia 「Australian Dairy Industry In Focus 2011」

③ 牛乳・乳製品の需給動向

主要乳製品の生産量は、国際的な乳製品需要の拡大を反映して増加傾向にあったが、干ばつ(2002/03年度)の影響により減少に転じた以降、多少の変動はあるものの減少傾向で推移している。2010/11年度の生産量を品目別に見ると、バター(バターオイルを含む)が前年度比4.6%減の12万3000トン、脱脂粉乳が同17.0%増の

22万3000トン、全粉乳が同20.1%増の15万1000トン、チーズが同3.1%減の33万9000トンであった。

表3 牛乳・乳製品生産量の推移

(単位:千キロリットル、千トン)

区分/年度	2006/07	2007/08	2008/09	2009/10	2010/11
生乳	9,583	9,223	9,388	9,023	9,102
飲用向け	2,156	2,188	2,229	2,269	2,316
加工向け	7,427	7,035	7,159	6,754	6,786
バター	101.7	99.2	109.8	100.1	96.3
バターオイル	31.4	28.4	38.7	28.2	26.2
チーズ	363.6	360.9	342.3	349.4	338.6
脱脂粉乳	191.5	164.3	212.0	190.2	222.5
全粉乳	135.4	142.0	147.5	126.0	151.3

資料: Dairy Australia 「Australian Dairy Industry In Focus」

注: 脱脂粉乳にはバターミルクパウダーを含む。

2010/11年度の主要乳製品の輸出量は、乳製品生産量と同様に、脱脂粉乳および全粉乳が増加した一方で、バターおよびチーズは減少した。

2010/11年度の乳製品生産量に占める輸出割合は、全粉乳が83.2%、脱脂粉乳が69.8%と生産量の過半を占めている。また、バター(バターオイルを含む)が45.6%、チーズが48.2%と、ともに輸出向け割合が高い。

乳製品の輸出先は、日本、東南アジアを含めたアジア地域向けの割合が高く、輸出額ベースで全体の73.9%と、圧倒的なシェアを占めた。特に粉乳類は、還元乳などの需要が多い東南アジア諸国向けを中心に、脱脂粉乳については約8割、全粉乳については約7割がアジア地域向けに輸出されている。

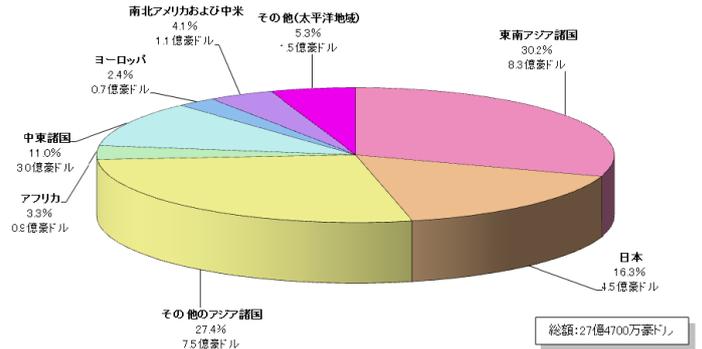
表4 主要乳製品輸出量の推移

(単位:千トン)

区分/年度	2006/07	2007/08	2008/09	2009/10	2010/11	輸出割合(2010/11)
バター	44.3	34.6	44.0	41.7	33.5	} 45.6%
バターオイル	36.7	22.5	26.5	32.0	22.4	
チーズ	212.3	202.4	144.7	168.1	163.2	48.2%
脱脂粉乳	160.3	119.8	162.1	125.6	155.4	69.8%
全粉乳	143.4	125.1	158.0	116.7	125.9	83.2%
飲用乳	69.2	59.9	59.9	64.0	70.4	3.0%

資料: Dairy Australia 「Australian Dairy Industry In Focus」

図6 地域別乳製品輸出額(2010/11年度)



資料: Dairy Australia 「Australian Dairy Industry In Focus 2010」

飲用乳の1人当たり消費量は、カフェ文化が浸透しており、牛乳の間接消費が多いため、高い水準にあり、2010/11年度は103リットルとなった。また、最近の健康志向を反映し、売り場面積が拡大しているヨーグルトは、7キログラム台に達した。一方、チーズは、前年度から1.6%とわずかに減少して、12.7キログラムとなった。

表5 1人当たり乳製品消費量の推移

(単位:キログラム)

区分/年度	2006/07	2007/08	2008/09	2009/10	2010/11
飲用乳	103.4	103.0	102.6	102.4	103.0
チーズ	12.0	12.5	12.9	12.9	12.7
バター	3.8	4.1	4.0	3.8	3.7
ヨーグルト	7.1	6.9	6.7	7.1	7.2

資料: Dairy Australia 「Australian Dairy Industry In Focus」

④ 乳価の動向

生産者乳価は、2004/05年度から2006/07年度は、1リットル当たり30豪セント台前半で推移していた。しかし、2007/08年度は、国際的な乳製品価格の高騰を反映して、同49.6豪セントと過去最高となった。その後、世界金融危機(2008年9月)以降の経済低迷、比較的高値で推移した豪ドルの影響から、2年連続で下落した。しかしながら2010/11年度は、乳製品の国際価格が堅調であったことから、前年度比15.8%高の同43.2豪セントと上昇した。

表6 生産者乳価の推移

(単位:豪セント/リットル)

年度	2006/07	2007/08	2008/09	2009/10	2010/11
生産者乳価	33.2	49.6	42.4	37.3	43.2

資料: Dairy Australia 「Australian Dairy Industry In Focus」

(2) 肉牛・牛肉産業

豪州の肉牛生産は、酪農と同様、牧草（放牧）に依存した構造となっており、牛肉生産量の6割以上を輸出に仕向ける輸出依存型産業である。

肉牛は、乳牛に比べると粗放的な飼養管理が可能であり、また、利用可能な草地の範囲が広いことに加え、熱帯・乾燥地域などの自然条件が厳しいところでも、これに適応する品種を選択的に導入することによって飼養が可能となることから、内陸部の極端な乾燥地帯を除き、ほぼ豪州全土で多種多様な品種による生産が行われている。

① 主要な政策

肉牛や牛肉の需給を管理する制度・政策は特になく、生産者は国内外の市場動向を勘案しつつ経営を行っている。また、豪州家畜検疫検査局（AQIS）などの政府機関が家畜衛生政策を、豪州食肉家畜生産者事業団（MLA）などの業界団体が販売促進、研究開発、市場情報の提供などを行っているが、これらの事業財源の多くは、生体の取引（販売）時に課される生産者課徴金（強制徴収）によるものである。

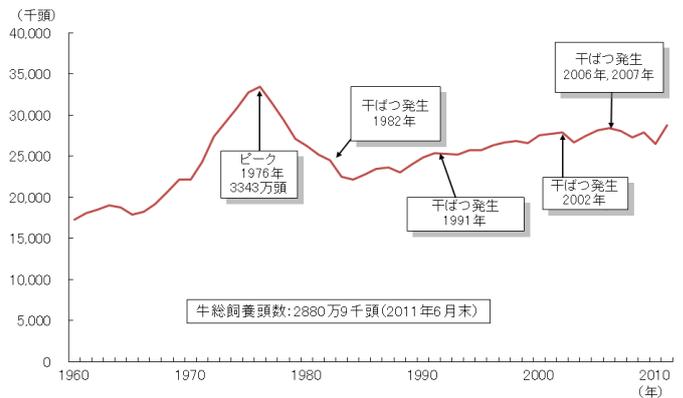
② 牛の飼養動向

豪州における牛飼養頭数（乳牛を含む）の推移を中・長期的に見ると、1960年代後半から70年代半ばにかけて、世界的な牛肉需要の増大を背景に急速に増加し、76年には過去最高の3343万頭を記録した。その後、第二次オイルショック（79年）などによる世界的な牛肉需要の減退や肉牛経営の悪化、大干ばつの発生（82年）などによりと畜頭数が急増し、84年には2216万頭と、ピー

ク時である76年の飼養頭数に比べ3分の2まで減少したが、それ以降は緩やかな増加に転じた。

2000年以降は、2600万頭台から2800万頭台の間で推移している。2002/03年度、2006/07年度および2007/08年度の干ばつの影響などによる増減がみられている。

図7 牛総飼養頭数の長期的推移



資料: ABARES 「Australian Commodity Statistics 2011」

肉用牛の飼養頭数は2000年以降、2400万頭台から2600万頭台で推移している。

2010年以降、東部を中心に気候に恵まれ、飼養環境が整ったことから、雌牛や子牛の保留による牛群再構築が進んでいる。2011年6月末時点の肉用牛飼養頭数は増加に転じ、2621万頭（前年比9.2%増）となった。

表7 牛飼養頭数の推移

(単位:千頭)

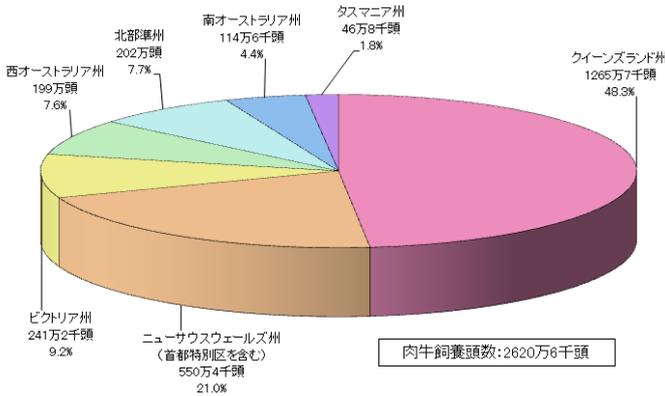
区分/年	2007	2008	2009	2010	2011
肉用牛	25,373	24,784	25,294	24,009	26,206
乳用牛	2,663	2,537	2,612	2,542	2,603
合計	28,037	27,321	27,907	26,550	28,809

資料: ABARES 「Australian Commodity Statistics 2011」

注: 各年6月末時点

肉用牛の飼養頭数を州別に見ると、QLD州（シェア48.3%）、NSW州（同21.0%）、VIC州（同9.2%）の東部3州で全体の8割近くを占めている。最近は、インドネシア向け生体牛輸出の拡大を背景に、QLD州北部や北部準州（同7.9%）で著しい伸びがみられた。

図8 州別肉牛飼養頭数(2011年6月末時点)



資料: ABARES 「Australian Commodity Statistics 2011」

③ 牛肉の需給動向

100年に一度といわれる干ばつに見舞われた2006/07年度は、肉牛の淘汰によりと畜頭数は増加し、牛と畜頭数(子牛を含む)は908万頭となった。2007/08年度以降は、牛群再構築の進展に伴って減少傾向で推移し、2010/11年度の肉牛と畜頭数は前年度比3.2%減の810万頭となった。一方、枝肉生産量については、天候に恵まれて飼料となる牧草が豊富であったことから、一頭当たりの枝肉重量が増加し、前年度比1.1%増の213万トンとわずかながらも増加に転じている。

輸出量は近年90~97万トンの間で推移している。2010/11年度は、金融危機後の世界的な牛肉需要の低迷により輸出量が減少した前年度から4.1%増となる93万7000トン(船積重量ベース)であった。

表8 牛肉需給の推移

(単位:千頭、千トン、キログラム)

区分/年度	2006/07	2007/08	2008/09	2009/10	2010/11
と畜頭数	9,081	8,680	8,583	8,364	8,097
生産量(枝肉重量)	2,226	2,132	2,125	2,109	2,133
輸出量(船積重量)	974	930	968	899	937
1人当たり消費量	36.3	34.6	31.4	34.6	33.0

資料: MLA 「Statistical Review」

注: と畜頭数は6月末時点、子牛を含む。生産量、輸出量および1人当たり消費量は子牛肉を含む

2010/11年度の国別輸出量(船積み重量ベース)は、最大の輸出先である日本向けが35万1000トン(前年度比0.4%増)、米国向けが16万トン(同24.0%減)、韓国向けは13万9000トン(同12.4%増)となり、主要3カ国向けは韓国を除いて低調であった。

一方、東南アジアや中東など新興市場における豪州産牛肉への需要は高まっており、上記主要3カ国以外への輸出量は同33.5%増の28万7000トンと大幅に増加した。輸出シェアも前年度の22.2%から30.6%と大きく伸びている。

表9 牛肉の国別輸出量の推移(船積み重量ベース)

(単位:千トン)

国名/年度	2006/07	2007/08	2008/09	2009/10	2010/11	輸出シェア(10/11)
日本	403	365	363	350	351	37.5%
米国	303	240	282	211	160	17.1%
韓国	157	146	113	124	139	14.9%
その他	111	179	210	215	287	30.6%
合計	974	930	968	900	937	

資料: MLA 「Statistical Review」

生体牛の輸出については、90年代中頃からインドネシア、フィリピンなど東南アジア諸国向けの肥育素牛を中心に急増した。生体牛の輸出は、97年のアジア経済危機の影響により一時的に減少したものの、その後の順調な経済復興や中東諸国など新規市場の開拓もあって、再び

増加基調に転じ、2002/03年度には、100万頭を超え史上最高となった。その後、一度は減少傾向に転じたものの、2005/06年度以降は増加を続け、2009/10年度には96万頭まで増加した。

しかしながら、最大の輸出先であるインドネシアが2010年、牛肉の自給率向上を目的に輸入頭数を制限したことから、同国向けの輸出頭数は大幅に減少した。その結果、2010/11年度の総輸出頭数は前年度比15.7%減の80万7000頭となった。

表10 生体牛の国別輸出量の推移

(単位:千頭)

国名/年度	2006/07	2007/08	2008/09	2009/10	2010/11	輸出シェア (10/11)
インドネシア	452.2	547.2	701.4	718.1	459.2	56.9%
トルコ	-	-	-	1.2	104.4	12.9%
イスラエル	54.4	59.0	27.7	36.4	53.4	6.6%
中国	12.0	6.8	16.0	53.3	50.9	6.3%
エジプト	-	-	-	33.4	23.1	2.9%
マレーシア	52.2	26.9	23.4	5.5	20.6	2.6%
サウジアラビア	26.2	14.8	24.9	7.7	19.5	2.4%
ロシア	-	-	-	9.4	18.4	2.3%
フィリピン	14.0	15.6	10.7	14.8	15.9	2.0%
日本	21.5	20.2	17.5	15.8	12.7	1.6%
その他	91.8	132.5	93.4	72.6	28.8	3.6%
合計	675.8	769.9	891.1	957.5	806.9	

資料:MLA「Statistical Review」

注:牛肉には子牛肉含む

1人当たりの年間食肉消費量は概ね110キログラム前後で推移し、2010/11年度については104.8kg(前年度比4.7%減)となった。健康志向や低価格を反映し、消費が増加傾向にある鶏肉(37.8キログラム)が最も多く、次いで牛肉(33.0キログラム)、豚肉(24.4キログラム)、羊肉(9.6キログラム)の順となっている。

表11 1人当たり年間食肉消費量の推移

(単位:キログラム)

区分/年度	2006/07	2007/08	2008/09	2009/10	2010/11
牛肉	36.3	34.6	31.4	34.6	33.0
マトン	3.2	2.0	1.4	1.0	0.5
ラム	11.2	11.1	10.7	10.2	9.1
豚肉	25.4	24.7	24.3	26.2	24.4
鶏肉	39.1	37.8	37.5	38.0	37.8
合計	115.2	110.2	105.3	110.0	104.8

資料:MLA「Statistical Review」

注:牛肉には子牛肉を含む

④ 肉牛価格の動向

2005年の加重平均肉牛価格(キログラム当たり320.7豪セント)は、干ばつ(2002/03年度)の影響が緩和し肉牛生産者の出荷抑制傾向が見られたことに加え、2003年12月に米国で発生したBSEの影響による日本や韓国など主要輸出市場からの豪州産牛肉に対する需要が引き続き旺盛であったことから、2001年9月以来の最高水準に達した。その後は、2006/07年度、2007/08年度の干ばつによると畜頭数増加や、日本や韓国の米国産牛肉の輸入再開による豪州産の需要低下により、肉牛価格は下落傾向で推移していた。

2010年は同304.3豪セント(前年度比8.1%高)と上昇した。これは、2010年初頭から天候に恵まれ牧草の生育が良好であったことから牛群再構築を図る生産者が肉牛を保留する傾向が見られ、牧草肥育牛生産者やフィードロット、食肉処理加工業者間で競合が強まったことによるものである。

表12 肉牛価格の推移(枝肉換算)

(単位:豪セント/キログラム)

区分/年	2006	2007	2008	2009	2010
若齢牛	340.7	324.1	332.8	319.7	350.1
肥育牛	324.4	311.8	318.6	298.6	317.5
経産牛	267.5	253.8	267.8	252.9	272.4

資料:ABARES「Australian Commodity Statistics 2011」注:若齢牛は枝肉重量200kg以下、肥育牛は同320~400kg、経産牛は同200~240kg